

## (翻訳) ナポリの腹

マティルデ・セラオー  
近藤直樹訳

〈sommario〉

È il commento e la traduzione in giapponese dei primi quattro capitoli del *Ventre di Napoli* di Matilde Serao. Si tratta del suo capolavoro, nato in risposta alla celebre battuta dell'allora primo ministro Depretis, il quale in un discorso sulle cattive condizioni igieniche di Napoli, che avrebbero causato il peggioramento delle vittime di colera, affermò: "Bisogna sventrare Napoli"! Scritto sulla scia di opere precedenti, quali quelle di Villari, Fucini, White=Mario, il *Ventre* di Serao non conclude né la denuncia sociologica né la critica sulla società partenopea, ma molto più profondamente si immerge e si identifica negli strati sociali più bassi di Napoli descrivendoli con tratti vivaci e robusti. Il risultato è un'opera importante sulla napoletanità, che resta ineguagliabile forse fino all'*Armonia perduta* di La Capria.

ナポリの腹を、えぐり出さねばならない

表現としては、的確です。あなたは知らなかったのだ、デプレーティス閣下、ナポリの腹を。あなたは間違っていた。あなたは「政府」であり、「政府」はすべてを知らなければならないのだから。当然ながら、カラッチョロ通りや紺碧の海、コバルトの空、魅惑的な婦人たち、そして日没の紫色の靄についての、文学的な色合いを添えたジャーナリズムの軽い記述など、「政府」に向けられたものではありません。こうした、ナポリ湾と花咲く丘から成る安手のレトリックの全てに対して、私たちはすでに恭しく償いをしてきましたし、今もまた苦しみ喘ぐ祖国を前にして、膝を折り償いをつづけています。こうした取るに足らぬ安易な、断片的な文学は、貧困についての物語を読んで憂鬱な気分になりたくない読者の役には立っています。けれども政府は、「別の面」を知らなければなりません。政府には、死亡と犯罪の統計が届けられるのです。政府には、県知事や警察署長、警部、代表委員たちの報告書が届けられるのです。政府には、刑務所長の報告が届けられるのです。政府はすべてを知っているのです。田舎の村で、日にどれだけの肉が消費されているのか、一年にどれだけのワインが飲まれているのか。こう言ってよければ、道を踏み外した女性がどれだけいるのか。そうした女たちの愛人が、どれほど咎められずにいるのか。慈善団体の施しにありつけない乞食がどれだけいるのか。どれだけの浮浪者が路上で夜を明かすのか。幾人の無産者が、幾人の商人がいるのか。モンテ・デイ・ピエタに質入れするとしたら、物品税はどれだけかかるのか、地所ならどれだけになるのか。こうした別の面は、こうしたナポリの腹は、「政府」が知らないとすれば、誰が知ろうというのでしょうか？それに、あなた

にその全てを語ってくれないのだとしたら、上から下までの役人たちは何をしていますのでしょうか？この巨大な官僚機構には、莫大な費用がかかっているというのに、何の役に立っているのでしょうか？そしてあなたが、国家の全てを知り、全てに対処する最高の知性でないのだとしたら、どうしてそんなあなたが首相でいられるのでしょうか？

庶民街の通りを、あなたは一つや二つ、あるいは三本くらいは見せてもらったのでしょうか、そして戦慄をおぼえたのですね。けれども、あなたは全てを目にしたわけではない。あなたを案内したナポリ人にしてからが、貧しき地区のすべてを知りはしない。メルカンティ通り<sup>1)</sup>を、あなたはすべて通り抜けたのでしょうか？

幅は四メートルほどで、馬車が通過できないほど狭く、曲がりくねって、まるで臓物のように振れているのです。太陽の照りつける好天の日にも、天高く聳える家屋に遮られて、蒼褪めて死んだような光の中に埋もれているのです。通りの真ん中には、黒く悪臭を放つ小川があるのですが、流れることなく泥沼のように沈滞していて、洗濯に使う灰汁や不潔な石鹼水、マカロニを茹でた湯やスープの残り汁など、様々な液体が混ざり合って、腐敗し臭気紛々としています。ポルト地区の主要な通りのひとつであるこのメルカンティ通りには、すべてがあります。あらゆる物売ろうと、影のような人が蠢く薄暗い商店。質屋に宝くじ店。所々に黒い門があり、所々に泥塗れの袋小路がある。また、古い油の籠えた悪臭を放つ揚げ物屋もあり、チーズの発酵臭や、腐ったラードの汚臭がする食品店もある。

この通りからは、たくさんの小路が走っていて、そのそれぞれが職業の名を冠しています。ザバッテリア通り<sup>2)</sup>、コルテッライ通り<sup>3)</sup>、スパダリー通り<sup>4)</sup>、タッフエッタナーリ通り<sup>5)</sup>、マテラッサイ通り<sup>6)</sup>等々。こうした小路は、メルカンティ通りよりもはるかに狭いのですが、ともに汚れて薄暗い。そして通りのそれぞれが、古い皮や、溶解した鉛、硝酸、硫酸など、異なった臭気を漂わせています。

いくつもの道が、高台からポルト地区へと降りてきます。それらはみな急勾配で、狭溢で、そしてろくに舗装もされていません。メッゾカンノーネ通りは染物屋で賑わっています。濃褐色の店の奥には、真っ黒な大鍋があり、その下には凄まじい炎が燃え上がっています。そして半裸の男たちが、朦々と立ち込める様々な種類の煙が混ざり合う中を掻き分けています。玄関のあたりには、赤や紫の端切れが干してあります。極彩色の澱がいつも、毀れた舗装の間に滴っては溜まりこんでいます。また、グラデッレ・ディ・サンタ・バルバラ<sup>7)</sup>という名の、やはりきわめて特徴的な通りもあります。そこには、道の両側に売春婦が住んでいて、通りを我が物顔に支配しているのです。不幸なその仕事のつれづれに、あるいは男性に対する陰鬱な憤りのためでしょうか、彼女らは日中、窓ごしに、外を通る人の頭上に、イチジクやスイカの皮、ゴミ、麦の芯などを投げ捨てます。その全ては路上の階段の上にならでも残っているため、清潔な人間であれば決してそこを通ろうとはしないほどです。女子寄宿学校の裏手に、ポルタノーヴァ広場へと続く道があります。メルカンティ通りがそこで終わり、ランツィエーリ通りがそこで始まります。実のところそれは道ですらなく、袋小路にすぎず、二本のアーチの下を通る漆黒の運河のようで、アフ

リカの一村落の全ての汚物をそこに集めたようなおぞましさです。その小路は、ある程度まで行くと、先には歩を進めることができません。路上は猥雑で、胃が身悶えるのです。

ヴィカリーア地区は、ご覧になられましたか？

その界隈を走っている道の中で、清潔なのはただひとつ、ドゥオーモ通りです。他の通りはすべて、古きナポリを体現するように、光もなく暗褐色で、老朽化のために倒壊の危機を迎えて、支柱で支えられた家屋が並んでいます。ソーレ通りという道があるのですが、それは太陽の光がまるで差すことのないためです。セッティモ・チエロ通り<sup>8)</sup>というものもありますが、それは古びた高層の家屋の間にほの見える、細い帯状の空が、あまりに天高く感じられるためなのです。サンティッシモ・アポストリ広場<sup>9)</sup>の周囲には、三、四本の通りが走っています。グロッタ・デッラ・マツラ通り、サンタ・マリア・ア・ヴェルテコエリ通り、カンパーナ通りです。カンパーナ通りには、近隣の煙草工場と、そして自らの汚物に感染し、痩せて蒼白の人々が住んでいます。偉大にして歴史を誇るヴィカリーアの所在地であるカプアーナ城の周囲はすべて、まさしくそうした環境を、つまりは、精神と物質の腐敗を思わせる場所で、そこに、この貧しく、そして不可避的に墮落した社会の究極の産物が、聳え立っているのです、牢獄が。

メルカート地区は？ああ、そうですね。かつてマサニエッロが革命を起こし、シュタウフェン家のコッラディーノが首を切り落とされた、歴史的な地区でした。そうでしたね、劇作家や詩人たちが書き残しています。鉄道駅から馬車に乗って来ると、この地区の一隅をかすめますが、すぐにマリーナ通りへと抜けてしまいます。詩や劇など悪魔にくれてやればいい！メルカート地区には、清潔な通りなどひとつもありません。まるで清掃員がもう何年も姿を見せていないかのよう。ところがそれもおそらくは、たった一日分の汚れなのです。

そこには、豊かな水源となるラヴィナイオ川<sup>10)</sup>があり、古き貧しきナポリの不潔なボロ布の全てが洗濯されています。ラヴィナイオ川は大きなせせらぎで、そこでは汚れ物が上辺だけ、洗浄されています。ナポリ人を穏当に、その正にナポリ的である点を侮辱する際には、「お前はまったくラヴィナイオ野郎だな」と言うほどです。メルカート地区には、〈ドゥケッサ（公爵夫人）〉の名を冠する通りが七本ありますが、そのうちのとある通りでは、公文書の言葉を信じれば、一時間のうちに三十件の事件が起こったこともあります。そこにはカヴァルカトイオ通り<sup>11)</sup>があり、サンタルカンジェロ・ア・バイアーノ通り<sup>12)</sup>があります。私も女性ですから、それがどういった通りであるかは申し上げられません。そこでは惨めさが、かくも根深く、かくも不憫なものですから、人間の性根が品位を喪失してしまい、羞恥の炎で頬が真っ赤に染まるほどです。

ナポリの腹をえぐり出す、ですって？それで充分だと思いですか？庶民街に、三、四本も道路を開通させれば、庶民を救済できるだなんて、夢みたいなことをおっしゃるのですか？あなたはお覧になるでしょう、この聖なる救済事業のための調査が完了したあかつきには、どれほど目映い真実が待ち受けていることか。作り直してしまわなければならないのです。

当然ながらあなたは、湿気のために亀裂が入った家屋をそのままにはしておけないでしょう。

地階は泥土で、最上階は、夏には焼け付き、そして冬になると凍えてしまう、そんな家屋を。階段はゴミ置き場と化しています。そして人々があれほど骨を折って水を汲み上げている井戸には、人間の生み出すあらゆる廃棄物が、あらゆる動物の死骸が、入り込んでいます。全ての建物には〈ごった煮〉が、いわゆるゴミ捨て場が中庭にあり、下女たちはそこに一切を捨てている。便所は、そんなものがあればですが、いかなる消毒をもってしても殺菌しきれません。

あなたは、小さな部屋に、少なくとも四人を超える人間が折り重なって眠るような家屋を、放置することなど出来なくなるでしょう。その上、雌鶏や鳩、痩せこけた猫に、ハンセン病にかかった犬までが同居しているのです。暗く狭苦しい小部屋で料理をし、寝室で食事をし、他の者たちが寝たり食事をしたりしているその同じ部屋で、人が死んでいくのです。階段下の隙間にまで人間が寝起きする家屋、それは今では廃止された、ヴィカリーアの、地下の古い牢獄に似ています。

あなたは、当然ながら、家と家を繋ぐ橋を放ってはおけなくなるでしょう。それに、家屋の外壁にぶら下がっている、あのひどい木造の小屋も。あの狭隘な門を、袋小路を、狭い小路を、回廊の上に設えられた小部屋を、あなたは、〈フォンダゴ<sup>13)</sup>〉を放ってはおけなくなるでしょう。

一階に質屋が入っていて、二階は学生に賃貸し、そして三階では花火を製造している、あなたはそんな家屋を放ってはおけなくなるでしょう。他にも、地階にビリヤード場、一階は、一晚三ソルド<sup>14)</sup>で泊まることのできる安宿、二階は貧乏人の集積場、三階にはボロ布の倉庫がある、そんな家屋を。

心と物の墮落を破壊するには、健康と自覚を、あの哀れな人たちに取り戻してやるには、彼らにどのように生きるかを教えてやるには——ご覧になられたように、彼らは死ぬことしか知らないのです——、彼らもまた、私たちの兄弟であり、私たちは彼らを愛していて、救済したいと願っていることを伝えてやるには、ナボリの腹をえぐり出すだけでは足りません。ほぼ全てを、作り直さなければならないのです。

## 彼らが、稼ぐもの

だがそれでも、こうした四つの庶民街<sup>15)</sup>に住み、空気もなく、光もなく、衛生にも事欠き、どす黒い小川の飛沫を上げて、ごみの山を飛び越えて、瘴気を吸い込み、汚染した水を飲んでいるこの人たちは、野獣のようで、野蛮で、怠惰な人間ではないのです。信仰に暗く、悪癖に沈み込み、不運に腹を立てるような人間ではありません。この民衆たちは、生来の優しい気質のために、白い家と丘を愛しています。それで、諸聖人の祝日に、心優しき人々がみな死者に花輪を捧げんと、ナポリからポッジョレアーレの丘へ、花と鳥と芳香と大理石であふれんばかりのあの墓地へと出かける折に、優しくこう叫ぶ声を耳にした者もいるのです「ああイエス様、死んじまいたい、ここに住めるんなら！」。

この民衆たちは明るい色を愛していて、馬車馬に様々な飾り房をくくりつけ、祭日には極彩色

の羽毛で身を飾り、首には赤いハンカチを巻いて、大量の小麦粉にトマトを乗せて、見た目にも鮮やかな効果を添える。彩色を施した木と、薫り高いレモンとグラスと瓶とで、輝く真鍮の傑作を作り出した。水売りの屋台という名の傑作を。

この民衆たちは音楽を愛し、自ら手掛ける。かくも愛情をこめて、かくも憂愁に歌い、その歌は胸を締めつけ、この地を遠く離れた者にとっては打ち勝ちがたい郷愁を惹き起こすほどで、奔流のように溢れ出す感情をともない、それが音の調和の中に染み渡っています。

つまりは、自らの墮落を愉しむ獣のような輩ではないし、醜悪なものの中からとりわけ戦慄を呼び覚ますようなものを好んで選んだり、進んで汚物を探し求めるような低級な種族でもないのです。状況によって課せられている現在の運命には、ふさわしくはありません。彼らは文明というものを理解することもできるのです。与えられた文明のわずかな破片を、すぐさま自家葉籠中のものとしたのですから。彼らは幸福になるだけの価値があるのです。

ああした場所に住んでいるのも、やむなくのことです。

それは構造的にして組織的な貧困で、かくも強烈で、かくも根深く、百もの慈善団体が寄り集まっても根絶には至らず、きわめて潤沢な個人の寄付をもってしても、打ち勝つことはかなわないのです。怠惰からくる貧困ではありませんから、誤解のなきように。それは働く者の貧困、肉体労働者の貧困、日に十四時間働く者の貧困なのです。

こうした労働者は、月に十四リラを超えるような家賃を払うことはできません。そんなことができるのはよほど幸運な労働者に違いありません。中には十リラを払う者、七リラを払う者もいます。ナポリの民衆の大多数は五リラしか払えません。数年前にある合弁企業が、カポディモンテの辺りに労働者の共同住宅を建設したのですが、それは、明るく、綺麗で、多少手狭ではありましたが、衛生的ですらあったのです。そこで価格を下げようと試みはしたのですが、月に三四リラを下回ることはかないませんでした。

労働者は誰も、そこに住むことはありませんでした。

居住したのは、家族持ちの会社員、幾人かの年金生活者、慎ましい暮らしの新婚夫婦など、要するに、自らの貧困を隠し、大理石の階段を手に入れようとした、小ブルジョワ階級でした。

その巨大な建築は、ナポリの貧困を証明するかのようになり、今でもそこにあります。いやそれどころか、そこに居住している用心深く高慢なブルジョワたちは、労働者の住宅に住んでいることを非難されることで自己愛を苛まれたあまり、中央入口に大きな文字で書かせたのです「この共同住宅は、労働者の家に非ず」と。冷酷にして尊大な碑銘を。

三四リラですって？その三四リラを、ナポリの労働者は一か月かけて手に入れるのです。一日の働きで一リラを家に持ち帰る者は、自分を幸せだと感じるのです。

ほとんどあらゆる職業において、あらゆる仕事において、報酬はきわめてわずかなものでしかありません。ナポリは、印刷の仕事が他のどこよりも安い国です。それは誰でも知っています。印刷工は他の国よりも三分の一安い稼ぎしか手にしていません。ミラノなら五リラ、ローマでは四リラ稼げるものが、ナポリだと二リラになります。この恵み深く不幸な国では、三号も出ない



うちに廃刊になるようなひどく安手の新聞が、どこよりも簡単に誕生し、そして長続きするので。仕立屋や靴屋、左官や建具屋の稼ぎも同じようなものです。時にはひどく骨の折れる労働を十二時間も続けて手に入れるのは、一リラや二五ソルド、せいぜいが三十ソルドの日銭です。手袋の裁断師は、一日に九十セント<sup>16)</sup>を稼ぎます。いいですか、ナポリの若者はイタリアでもっとも着こなしがいいのです。もっとも美しい靴や、もっとも美しく安価な家具はナポリで作られている。ナポリは最上の手袋を生産しているのですよ。より低級な仕事だと、報酬は七五セントや十二ソルド、十ソルドになります。そうしたわけで彼らは、五リラや七リラ、十リラといった毎月の家賃を払うことができない。そして貧困に迫られて、女は、妻は、母は、既にたくさんの子を産み、授乳した者たちは、家事に勤まなければならないはずの者たちは、仕事を探すのです、外で。

煙草工場の職にありついた女たちは幸運です。仕事ができても身も安泰。洋裁師や帽子縫い、花売りも！報酬はきわめて慎ましく、月に十五リラや十七リラ、あるいは二十リラでしかありません。それでも彼女たちにしてみれば幸運に思えるのです。けれどもそんな職はわずかしかない。残りの、貧困階級の女性たちはみんな、家政婦をやります。

ナポリの女中は、昼食も食べずに働いて、月に十リラしか稼ぎません。朝には自宅から主人の家まで、二マイルか三マイル歩いて通い、日に四十回も階段を昇り降りしては、深い井戸からバケツ二十杯の水を汲んで、もっとも疲労度の高い仕事を片付けますが、一日中何も口にせず、夜になると体を引きずりながら帰宅する姿は、衰弱した影のようです。中には二軒の家を掛け持ちする者もいて、一か所につき六リラもらいながら、ひっきりなしに二軒の間を駆け回って、遅刻したといって主人に叱られるのです。そうした女性を一人、私は知っています。彼女の名前はアンナレッラ、毎日三軒の家を掛け持ちし、一軒につき五リラしかももらっていませんでした。物も食べずに疲労のせいで死人のようになって、夜には呆けた体で帰宅し、時には服を脱ぐこともなく、すぐに眠り込んでいました。

こうした女中たちはそれでも、子供に乳を与え、靴下を繕う時間を見つけていますが、化け物のような外観で、憐みと同じだけの嫌悪を惹き起こします。彼女たちは三十歳でありながら五十女のように、背中が曲がり、髪も抜け、歯の色は黄色や黒、跛のようにフラフラ歩き、一着の服を四年着続け、エプロンは同じものを半年換えません。

彼女らは、嘆くこともなく、泣くこともありません。四十にならないうちに、悪性マラリアや肺病か、あるいは他のひどい病気に罹って、病院で命を落とします。こういう女たちをどれだけ、コレラが連れ去ってしまったことか！

そして、女性によるその他のあらゆる露店の職業、洗濯女、髪結い、日雇いのアイロンがけ、椅子の藁直しといった職業は、彼女たちをあらゆる悪天候や事故、さまざまな種類の病気にさらし出し、大変な重労働かあるいは吐き気をもよおさせるような仕事なのですが、この不幸な女たちに、日にわずか十ソルドか十五ソルドしかもたらしてくれません。この哀れな女たちは、一リラを手に入れると蓄えて、そうやって結婚していくのです。

彼女らは醜い、それは事実です。身なりに構わない、それは疑いようのない事実です。そして時には嫌悪をもよおさせます。けれども、造形芸術をこよなく愛する人であれば、その存在の神秘に分け入り、彼女たちが日常の受難と、計り知れない犠牲と、不平をこぼつこともなく耐え忍ぶ労苦の詩であることが分かります。青春に、美に、洋服ですって？彼女たちはほんの一瞬、青春と美とを手に入れて、愛され、そして結婚したのです。その後は、夫と、貧困と、労働と、殴打と、労苦と、飢え。子供を抱えていながら、手放さなければならない。末っ子を上の娘に預けるのですが、他のすべての母親と同じく、馬車や、火事や、犬や、転倒が心配でなりません。仕事をしている間、彼女たちはつねに落ち着かず、不安なのです。

ある女のことが思い出されます。その人には三人の子供がいたのですが、末の男の子が特に可愛らしかった。その子はもう二歳になったというのに、母親はまだお乳を与えていました。他に食べさせるものがなかったのです。その子は毎晩、〈バスソ〉の階段の上に座って、母親の帰りを待っていました。貧民救護の医師は言っていました。「お乳をやめなさい。この子は病気になってしまうよ」。彼女はうなだれるばかりでした。お乳をやめることができなかったのです。その子はチフスに罹り、そして亡くなりました。母親は台所でジャガイモの皮をむき、小さな声で嘆いていました。「坊や、わたしの坊や。あたしがあんたを殺したようなもんさ、あんたを死なせちゃったんだよ！ああ、なんてひどい母さんだったんだろう！坊や、これから先、毎晩誰が玄関先であたしを待ってくれるんだい？」

子供の仕事ですか？ああ、紳士向けの御者が十二歳の子を見習いに雇ってくれたなら、母親たちは嬉しくてたまらないでしょう。たとえ賃金なしで食事がもらえるだけだとしても。それに、店の「親方」に雇ってもらって、犬のように働かされて、夕方にスープ一杯がもらえるだけだとしても、やはり喜ぶことでしょう。憐み深い母親は、毎朝子供に、弁当代として一ソルドくれるのです。

洋裁師や、帽子作りや、花売りや、コルセット作りは、十二歳くらいの女の子を見習いに雇ったりしますが、その子たちは実のところ、小さな召使のようなもので、週に五ソルドしかもらっていません。こうした子供たちは、大体の場合は、家か路上で一日を過ごしているのです。

田舎では、子供は喜びであり、助けの手であり、豊かな暮らしの源泉でしょう。ナポリでは、心配の種であり、母親の心痛であり、涙と飢えの源泉を意味するのです。

ナポリの女工が子供たちを呼ぶときに、ちょっと聞いてみてください。彼女は「<sup>クレアトゥーレ</sup>ぼうや」と言うのですが、憂いを帯びた優しさと、母性に満ちた憐みと、ナポリの貧困のあらゆる苛酷を鋭くも知り尽くしたような痛ましい愛情をこめて、その言葉を口にします。

## 彼らが、口にするもの

ある日、ひとりのナポリの企業家が名案を思いつきました。〈ピッツァ〉がナポリ料理の中でも人気の一皿であるならば、それにローマには広大なナポリ人のコロニーがあるのだから、ロー

マにピザ屋を開店すればいいじゃないかと。銅のピッツァ鍋はキラキラと輝き、窯にはいつも火が燃えたっていました。あらゆる種類のピッツァがその店にはありました。トマトのピッツァ、モッツアレッタとチーズのピッツァ、アンチョビとオリーブオイルのピッツァ、オリーブオイルとオレガノとニンニクのピッツァ。最初のうちは客で賑わっていました。それから次第に閑散としていったのです。ピッツァはナポリの風土から切り離されてしまうと、なんだかちぐはぐで、消化不良を起こしてしまったようでした。ローマに来るとピッツァという星の輝きは色褪せて、沈んでいったのです。外国種の植物が、ローマの荘重の中で死滅していくように。

まさにその通り。事実、ピッツァは、わずか一ソルドで手に入る大量の食品群のひとつで、ナポリの民衆の大半が朝に昼に食しているのです。

店をかまえたピッツァ職人は、夜のうちに、濃厚な小麦粉をこねて平たくした円形の生地を大量にこしらえて、調理するというよりも、焼き焦がし、ほとんど生のトマトや、ニンニクや、胡椒や、オレガノをふんだんに振り掛けます。多くの地域で、一ソルドで食べられているこうしたピッツァは、給仕に託されます。すると給仕は道の角に露店を出して、日がな一日そこにいてピッツァを売ります。露店のピッツァは、寒い冬には凍りつき、日差しが強いと黄ばんで、蠅がむらがつてきます。学校に通う子供たちの弁当用に、二セント分の切り売りもしてくれます。在庫が切れてしまうと、ピッツァ職人は夜までに補充をします。

さらにまた夜になると、ピッツァの入った凸状の巨大な錫の容器を頭に乗せて持ち運ぶ給仕もいます。彼らはこうして街路をめぐり、トマトにニンニク、モッツアレッタにアンチョビの乗ったピッツァですよと言いながら、独特の叫び声を張り上げます。〈バツ〉の階段に座った貧しい女性たちはそうした一ソルドのピッツァを買い、夕食だか昼食だか分からない食事をするのです。

一ソルドあれば、ナポリ庶民の食事にはさまざまな選択肢が広がります。揚げ物屋では、魚売りの籠の底に余った小魚を集めた〈フラガーリア〉という、紙で包んだフライがひとつ食べられます。揚げ物屋ではまた、一ソルドを出せば、〈パンツァロッティ〉という、アーティチョークの破片だとか、キャベツの芯だとか、アンチョビの切れ端なんかが入った揚げ物が四つか五つは食べられるでしょう。一ソルド出せば、老婆が茹で栗を九つもくれます。外側の皮を剥いて、赤茶けた汁に浸した栗です。ナポリ庶民はまずはその汁の中にパンをつけて味わい、それからメインディッシュのように栗を食べるのです。また一ソルドあれば、大鍋を荷車に乗せて引きずって歩く老婆から、茹でトウモロコシを二本買えます。飲み屋では、一ソルドで〈スカパーチェ〉が一盛り買えます。それは、ズッキーニかナスを油で揚げ、酢と胡椒とオレガノとチーズとトマトで和えたもので、路上で販売されています。大きな深底の甕に、まるで貯蔵庫のように詰め込んで、そこからスプーンですくって切り分けるのです。ナポリの庶民はパンを一切れ持って行き、それを半分に切ると、店の主人がその上に〈スカパーチェ〉を乗せてくれるのです。居酒屋では、やはり一ソルドで〈スピリトーザ〉も買えます。それは、黄色人参の薄切りを水で煮た後、酢と胡椒とオレガノとニンニクと唐辛子を入れた辛いソースで和えたものです。居酒屋の亭主は店先



に立って、「いい匂いだよ、いい匂い、スピリトーザ！」と叫びます。当然のことながら、こうした料理はどれもみな、ひどく辛めの味付けになっています。それともいうのも、南イタリア人のこの上なく無気力な舌を満足させるためなのです。

二ソルドばかり手に入れると、ナポリの庶民は茹でて味付けをしたマッケローニを買いに走ります。四つの庶民街には、どんな通りにでもこうした居酒屋があって、店先に設えた大鍋ではいつでもマッケローニが茹でられ、浅鍋ではトマトのソースと、削ったチーズの山、コトローネ原産の辛いチーズが煮込まれています。

何よりもまず、こうした情景がさわめて絵画的であり、何人もの画家たちによって画布に描きとめられ、清廉で優雅といえるほどまでに描かれて、居酒屋の亭主はヴァトーの羊飼いを思わせるほどです。イギリス人たちが購入するナポリの写真のコレクションでは、「家庭の尼僧」や「ハンカチ泥棒」「シラミだらけの一家」とならんで、「マカロニ屋台」が人気を集めています。この屋台のマッケローニは、一皿二ソルドか三ソルドで売られています。ナポリの庶民はそれを縮めて、「二をひとつ」とか「三をひとつ」といった具合に値段で呼びます。ボリュームが少ないために客たちは、もう少しソースをかけてくれたの、チーズを足してくれたの、マッケローニを増やしてくれたのと言っては、亭主と喧嘩をはじめます。

二ソルドで買えるものといえば、海水で茹でて唐辛子で味を調えたタコがあります。こうした商売は女性が、七輪と小さな深鍋を使って道端でやっているのです。〈マルツェ〉も二ソルドで手に入ります。それはカタツムリの入ったスープで、堅パンがスープに突っ込んであります。また居酒屋の亭主は二ソルドで、豚のラードの細切れと、臓物、玉ねぎ、イカの細切れをまとめて乱雑に揚げているフライパンから、スプーンになみなみと掬い上げて、客が持参してくるパンの上に乗っけてくれます。その際には、煮えたぎった茶色い脂が地面に落ちずに、パンに全部乗るように気を配ります。それが客のこだわりなのです。

お昼時に三ソルドがなんとか手元があれば、家族をこよなく愛すナポリの善き庶民は、出来あいの惣菜を買うために居酒屋へ行くようなことはせず、家に帰り、〈パツ〉の敷居の地面にしゃがみ込むか、あるいはボロボロの椅子に座って、食事をするのです。

四ソルドあれば、まだ青い生のトマトと玉ねぎの山盛りサラダか、炒めたジャガイモと甜菜のサラダ、あるいはカブとブロッコリのサラダ、もしくは新鮮な胡瓜のサラダが作れます。

一日に八ソルドを自由に使えるような裕福な人は、キクヂシャ、キャベツの葉、チコリ等々の野菜を全部一緒に煮込んだ、〈ミネストラ・マリタータ〉という野菜盛りだくさんのスープを口にします。あるいは時間がある時には、黄色いカボチャに胡椒をふんだんにかけてたスープや、鞘インゲンをトマトで味付けしたスープ、そしてトマトとジャガイモを茹でたスープなんかを味わいます。

けれども大抵の場合は一ロートロのマッケローニを買います。それは黒ずんで、量も大きさもさまざまなパスタのごった煮で、〈モンネツァリーア<sup>17)</sup>〉と正に言い得て妙な名前をしているのですが、トマトとチーズで味付けをして食べます。

ナポリ人は果物に目がないのですが、一度に一ソルド以上はけして使いません。ナポリなら、一ソルドで洋梨が六つも買えます。少し傷んでいますが、まあたいしたことはありません。それに、イチジクなら陽に当たって少し張りがなくなったのでよければ、半キロ買えます。プラムなら十個か十二個、熟でもあるみたいに黄色いのですが。黒ブドウなら一房。そして黄色いマスクメロンなら、小さくて、傷があつて、腐りかけているのが手に入ります。メロン売りからは、果肉の赤いメロンが、出来の悪い、つまりは白っぽくなっているものでよければ、二切れ買うことができます。

ナポリ人の大好物は他にもあります。(スパッサティエンボ)、つまりはメロンの種やソラマメ、オーブンで焼いたヒヨコ豆なんかの事です。一ソルドもあれば、半日はそれを齧ってられます。舌を刺激し、お腹は膨れて、まるで食事をしたような具合になるのです。

一番のお気に入りには(ソッフリット)。豚肉の細切れを、オリーブオイルとトマトと赤ピーマンで炒めて煮詰めると、目にも美しい赤い塊が出来上がります。それを薄切りにするのですが、これは五ソルドします。口に入れると、まるでダイナマイトのようです。

#### 質問票

- ロースト肉は？ - ナポリの庶民は、食べたことがない。
- 煮込み肉は？ - 時おり、日曜日や祝祭日に。けれども豚か羊の肉。
- 肉のスープは？ - ナポリの庶民は、そんなもの知らない。
- ワインは？ - 日曜に、時おり。一リットル四ソルドの〈アスプリーノ〉か、五ソルドの〈マラニエッロ〉。テーブルクロスがそれで青色に染まってしまう。
- 水！ - いつでも。ただしひどく不味い。

#### 小 祭 壇

あなたは街角の小祭壇に驚かれるのですか？素足で髪を掻き乱して、聖母の像を掲げながら聖歌を歌う女たちの行進に、動揺なさるのですか？ナポリ民衆の迷信は、— ああ、きわめて善良でありながらかくもひどい生を送り、大きな諦念とともにかくも悲惨な死を迎える哀れな者たちよ—、この民衆の迷信というものは、あらゆる人々に痛ましい衝撃を与えました。そうした迷信が消滅したと信じているのですか？どうすればそんなことを信じるにいたるのでしょうか？つまりは、もうすっかり忘れてしまったというのですか？1865年のコレラ<sup>18)</sup>の際には、行列や公開祈祷が行われました。統一戦争以降もっとも凄惨で甚大な被害をもたらした1867年のコレラ<sup>19)</sup>の時には、あらゆる教区から聖母や守護聖人の像が持ち出されて、いくつもの行列が街路で顔を突き合わせては、合流したものです。それはまさしく、中世的で南部的な神秘そのものでした。今日サヴォイアのウンベルト王が目にする行列は、十七年前に偉大なるヴィットリオ・エマヌエーレ王が見たものと少しも変わるところがありません。1872年の噴火の際には、三日間

にわたって溶岩がナポリを脅かしました。庶民の女たちは聖ジェンナーロの胸像を求めてドゥオーモに駆けつけました。それを持ち出して市中をめぐり、溶岩を堰き止めようと考えたのです。高貴なる聖遺物の管理人や司教座聖堂参事会員たちは、最初は彼女たちの要求を拒絶して与えようとはしませんでした。四日目になっても太陽は顔を見せず、灰を含んだ濃密な雲がナポリの空を覆い、古のポンペイのように灰が降り始めました。あらゆる地区の庶民の女たちが、泣きながら、叫びながら、陰惨な行列をしました。1873年のコレラは比較的穏やかではありましたが、それでもきわめて激しいもので、四つの庶民街では、バンキ・ヌオーヴィの救いの聖母や、ポルト地区のポルト・サルヴォの聖母、大学通りの教会のコロンナのイエス像などが持ち出されて行列が行われたではありませんか。ああ、私たちの記憶のなんと儂いこと！

それでは、日々の暮らしは？あたりを見回して、たとえ表面的にでも目の前で起こっていることを観察すれば、ナポリ民衆の宗教的な昂揚が途絶えてしまったなんていう幻想を抱く者は、誰もいないでしょう。二本のロウソクを点した街角の小祭壇は、宗教的な祝祭時には、庶民街のすべての辻に見かけます。確かに、それを手掛けているのは子供たちです。けれども、母親が目を配り、その子の姉たちが通行人に寄付金を求めるのです、笑ったり、頼み込んだりしながら。より大掛かりな祝祭の日には、オッティーノ風<sup>20)</sup>の照明と極彩色の花綱をめぐって、庶民たちは一年がかりで割り当てを決めています。路地同士で優劣を競いあうのですが、張り合うことで喧嘩になったり、ナイフで切り合ったりすることも多々あります。この照明は目にも艶やかで、芸術品という自らの技に見とれるような利己的な芸術家たちを陶醉させてしまいます。また別件。女性は大病から回復すると、神への感謝のために、地域のすべての家庭をまわっては寄進のための寄付を集めるという誓願を行います。まだおぼつかない足取りで、顔も蒼褪めて、階段をのぼってはまた降りて、素っ気ない拒絶にあったり、眼前でドアを閉められることもあります。それでもかまわない、耐えなければならない、それが誓願なのだから。集まったお金はすべて、教会に送られます。子供が病に罹ると、聖フランチェスコに誓願を立てます。その子が治ると、母たちは、粗雑な僧服や帯を着せ、素足にサンダルを履かせ、使い古した侍者服をかぶせて、要するにモナチエッコのような格好をさせるのです。庶民街でこうした子供を目にしたことのない者はいないでしょう。

聖ジェンナーロの奇蹟について、あなたはまたもや驚愕されるのでしょうか？彼の末裔を自認しているモーロ地区の古くからの住人たちは、奇蹟を待つ間主祭壇に殺到して、余所の者を近寄せようとはせず、〈クレード〉を叫びながら、儀式が繰り返されるにしたがって声を荒げ、果てには咆哮になり、まるで悪魔に憑かれた者たちのように体を揺すり、「意地悪じい」「糞じい」「しみつたれ野郎」といった言葉で聖人を罵るにいたります。月が迫っているのに子供が出てこない妊婦のお腹の上に置かれる、聖アンナの足というのもあります。サンタ・マリア・ラ・ノーヴァ教会にある聖ジャコモ・デッラ・マルカの遺骸の前には、ランプがありますが、その火を燃やしている油は、頭の病気に効くと言われています。カルミネ教会の十字架像は、傷口から血を滴らせたことがあります。メルカンティ通りには、ナポリの初代大司教である聖アスプレー

ノの名を冠した教会がありますが、その地下教会には聖ペテロの杖が保管され、信仰を集めています。サン・ピアジョ・アイ・リブライ通りには、喉の病気を治してくれる聖水が湧いています。サン・ニコラ・ディ・バーリ教会の聖パンの屑は、嵐の時に空中に投げると、稲妻から逃れることができるといいます。ナポリには、聖遺物として、何百という聖遺骨が、ヴェールの切れ端が、服の端切れが、木の破片があります。ナポリ女はみんなそうした聖遺物の入った袋に祈祷文が印刷されているのを首にかけたり、帯にぶら下げたり、あるいは枕の下に置いたりします。その袋を、生まれたばかりの赤ん坊の産着に縫い付けるのです。

ナポリ人には、カルミネの聖母ひとつで充分だと思いませんか？私が数えたところ、聖母には250もの呼称があるのですが、それでも全てではありません。中でも、四つか五つが主要なものです。ナポリ女が病に罹ったり、数多くある深刻な危機のいずれかに瀕したりすると、こうした聖母のひとつに誓願をします。その後、禍が去ると、教会で祝福を受けた服を、新しい服を着るのですが、それが擦り切れるまで着続けます。悲しみの聖母への誓願の場合は、黒い服と白いリボン。カルミネの聖母には、赤茶色に白いリボン。無原罪の御宿りの聖母には、白い服と青いリボン。ラ・サレットの聖母には、白い服とピンクのリボン。服を新着するお金がない場合には、エプロンを作ります。誓願を果たすことができない場合には、怯えながら、家の中で災厄を待つしかないのです。

そして、聖なるものは俗なものに混じり合っています。亭主がほしいのならば、聖ジョヴァンニに九日間の祈祷を捧げ、つまりは九夜にわたって深夜、バルコニーに出て、特別の交誦のようなものを唱えなければなりません。もしもそれを実践する勇気があるのなら、九日目の夜に、炎の閃光が空をよぎるのが見えてきます。その炎の上では、呪われた踊り子サロメが踊っているのです。その後間もなく、夫の名前を呼ぶ声が聞こえてきます。聖パスクワーレも、適齢期の少女たちの守護聖人になってしまっていて、九夜にわたって「おお、聖なる人パスクワーレよ、私に夫を遣わしてください。あなたと同じような、美しく、血色もよく、健康的な夫を。おお、聖なる人パスクワーレよ」という交誦を唱え続けなければなりません。聖パンタレオーネもまた、少女たちの守護聖人ですが、趣は違っています。少女たちに宝くじの当選番号を教えて、当選金を持参金に充当し、彼女たちが結婚できるようにしてくれるのです。九夜にわたって、深夜に、部屋に引き籠って、ひとりきり、バルコニーを開けて、ドアも開けて、〈アヴェ〉と〈パーテル〉の祈祷の後で、次のような交誦を唱えなければなりません。「我が聖パンタレオーネ様、あなたの純潔にかけて、私の処女なる純潔にかけて、数字をお与えください、お願いします！」。九夜目に、足音が聞こえます。それは聖人の来訪する音で、そして何かを打つ音がするのですが、その数が宝くじの当選番号になっているのです。この奇妙な儀礼の四日目か五日目の夜に、少女たちは興奮のあまり、幻視を見て、痙攣を起こして卒倒してしまいます。そうした少女たちの中には、九夜目に何かを見たり、聞いたりしたという者もいます。けれども彼女たちには信仰が足りなかったために、奇蹟が起こらなかったのです。

世界中に散らばっている迷信のすべてが、ナポリに集められていて、肥大し、複雑化していま

す。私たちはみんな〈邪眼〉を信じています。私たちは、こぼれた油、割れた鏡、ナイフと十字に交差したスプーン、裏表逆に身に着けた下着がもたらす幸運、質屋で手に入れたお金、蜘蛛、サソリ、雌鶏なんかの話はいたしません。そんな古い迷信など、誰が気に掛けるでしょうか。ナポリ人たちはいまだに巫女を信じています。ヴィットリオ・エマヌエーレ通りへと続くチェント・グラデー大階段には、「キアーラ・ステッラ」が、メッツォカンノーネ通りには「グラーツィアさん」がいて、二人ともきわめて有名な巫女です。他にもたくさんの巫女たちがいます。五十セントやニリラ、五リラなどの代金で要件を聞いてくれるのです。ナポリ人たちは〈霊〉も信じています。あらゆる家に徘徊するナポリでよく知られた〈霊〉といえば、〈モナチエッロ〉<sup>21)</sup>でしょう。それは子供の霊で、幸運をもたらす時には白い服を、災いをもたらす時には赤い服を身につけて姿をあらわします。大勢の人たちが、〈モナチエッロ〉を目にしたことがあると私に語ってくれました。ナポリのど真ん中にあるサンタ・テレーザの階段には、けして住人が住み着いたことのない、この上なく美しい屋敷があります。二十年もの間、その屋敷の窓が開いたのを見たことがありません。それというのも、そこには〈霊〉が住み着いているからなのです。ナポリ人たちは、宝くじの当選番号を教えてくれる〈霊〉の存在を信じ、〈アッシステイト〉<sup>22)</sup>を信じています。〈アッシステイト〉というのは、この上なく奇妙な人種で、ある者は善意から、ある者は寄生することを目的として、ほとんどものを口にせず、飲むものといえば水ばかりで、意味不明な言葉を喋り、寝る前には断食をして、そして幻視を見るのです。宝くじ狂たちに寄生しながら、自らはけっして券を買うことがありません。時折、宝くじ狂たちはアッシステイトをひどく叩いて、その後で許しを請うたりします。修道僧たちも幻視を見ます。ナポリ近郊のマラーノに、幻視で有名な修道僧がかつていました。人々は列を成して彼のものを訪れました。サン・マルティーノ修道院にいた若者も、随分と名を知られていたものです。時折、宝くじ狂たちは修道僧を監禁したり、叩いたり、拷問を加えたりします。そのために死んだ僧も、一人いました。その僧は息を引き取る前に、数字を口にしました。その数字を賭けたところ、当選して、ナポリ人の半分が賞金を手にしました。新聞がその数字を掲載していたのです。

ナポリ人、とりわけ女性たちは、呪術を信じています。〈まじない〉には、熱烈な伝道者たちがいます。〈妖術師〉あるいは魔女は溢れかえるほどです。遠くに行ってしまう夫が浮気することのないよう、妻が願っているとしたら？ 魔女はその妻に、結び目のついた紐をくれます。それを夫の上着の裏打ちに縫い込んでおくのです。ある男性の愛を手に入れたいとすれば？ 〈妖術師〉は、あなた方の髪の毛を燃やして、灰にして、それに秘密の成分を加えます。その粉をワインの中に入れて、無関心な男に飲ませるのです。裁判で勝訴したいのなら？ 相手側の弁護士の舌を、精神的に縛り付けてしまうのです。それには、紐に十五の結び目をつくり、悪魔を呼び出し、身の毛もよだつような呪文を唱えなければなりません。不実な恋人を死なせようとするならば？ 鍋に毒草をいっぱいに入れて、深夜、相手の家の門の前で火にかけるのです。恋敵の女を死なせようとするならば？ 新鮮なレモンにたくさんのピンを突き刺して、その女の姿になるようにするのです。そしてその女の服の切れ端をそこに貼り付けると、そのレモンを、女の家の井戸の中に投げ



入れるのです。〈まじない〉は、きわめて広範にわたって普及しています。それは時おり下劣にもなる、呪文や祈祷による奇妙な文学です。それは、臆病な者と大胆な者を選別します。そしてあらゆる地区に広がっている。感傷的な欠乏や野蛮な欠乏のすべてに対して、優しい欲望や血生臭い欲望のすべてに対して、援助の手を差し伸べてくれるのです。

これですべてです。いやつまりは、すべてではありません。私の述べたことを、二十倍も誇張してみればどうでしょう。それでも、おそらくは、真実には至らないでしょう。こうした、信仰と過誤の、神秘主義と官能性の寄せ集めに、かくも異教的な外的崇拜に、この偶像崇拜に、あなたは戦慄をおぼえるのでしょうか？こうした未開人のごとき蛮行に、苦言を呈されるのでしょうか？ですが、ナポリ人の良心に働きかけようとした人が、果たして今までにいたでしょうか？どのような教訓が、どのような言葉が、どのような模範が、かくも自己表出的で、かくも捕らわれやすく、かくも熱狂的な生来の資質をもつ人々に、与えようと考えられたでしょうか？実のところ、現実の生活の底深い貧困のために、ナポリ人たちは、自らの想像力の幻影にしか慰めを見出せず、神の中にしか避難場を見つけることができなかつたのです。

### 使用テキスト

Serao Matilde, (2002), *Il ventre di Napoli*, a cura di Patricia Bianchi, Avagliano, Roma.

### 参考文献

Banti Anna (1965), *Serao*, Utet, Torino.

Ghirelli Antonio (1995), *Donna Matilde*, Marsilio, Venezia.

Scafoglio Domenico (2000), *Numeri: il gioco del lotto a Napoli*, L'Anch'ora del Mediterraneo, Napoli.

Serao Matilde (2004), *Leggende napoletane*, a cura di Patrizia Di Meglio, Imagaenaria, Ischia.

ID. (2008), *Il paese di Cuccagna*, a cura di Riccardo Reim, Avagliano, Roma.

## 解 題

### 1. 1884年のコレラと『ナポリの腹』

1884年5月に既に兆候が見られたコレラは、無知からくる対策の遅れと、とりわけナポリ市内の衛生状況の劣悪さのために、8月に入ると猛威を振るうようになり、9月7日から11日にかけて、市内ばかりか郊外にまで蔓延していく。結果的にナポリ市内で7,000人、周辺の諸地域で8,000人の犠牲者を出す惨事となった。とりわけ、〈バツソ〉や〈フォンダコ〉といった、元來は住居のための空間ではなかったところに貧民が住み着いた居住空間が密集する四つの庶民街（ヴィカリーア、ポルト、ペンディーノ、メルカートの四地区）に被害が集中した。

9月9日、国王ウンベルト一世は、デプレーティス首相をはじめとする要人を率いて、四日間のナポリ視察を敢行する。一行は病院や被害者の出た住居に足を運び、その惨状に言葉をなくし

た。正確に言えば、「ナポリの腹をえぐり出さなければならない *Bisogna sventrare Napoli*」という警句を口にしたデプレーティス首相だけは、例外であったのかもしれない。デプレーティスの言葉は新聞各紙が取り上げ、瞬く間にイタリア中に知られるようになる。

当時ローマで「ピタン・フラカッサ」紙の記者として働いていたセラオは、自らの郷里であるナポリの惨状を憂い、そしてデプレーティスの言葉に衝撃を受けた。最初のエッセイ「ナポリの腹を、えぐり出さねばならない」が「カピタン・フラカッサ」紙に掲載されたのは9月17日で、その後セラオの〈ナポリ論〉は合計9本を数えるようになり、同年12月には、ミラノの出版社トレヴェスからまとめて『ナポリの腹 *Il Ventre di Napoli*』として刊行された。

『ナポリの腹』を構成する9本のエッセイの内訳は以下の通りである。①「ナポリの腹を、えぐり出さなければならない *Bisogna sventrare Napoli*」②「彼らが、稼ぐもの *Quello che guadagnano*」③「彼らが、口にするもの *Quello che mangiano*」④「小祭壇 *Gli altarinini*」⑤「宝くじ *Il lotto*」⑥「再び、宝くじ *Ancora il lotto*」⑦「高利貸し *L'usura*」⑧「ピトレスク *Il pittoresco*」⑨「慈悲 *La pietà*」。今回はその前半4編を全訳した。

連載終了から2か月後に書籍として刊行されたことから分かるように、『ナポリの腹』の反響は凄まじく、ナポリのみならずイタリア全国に向けて、改めてナポリの諸問題を知らしめたため、同書への評価はすなわち、〈ナポリ問題〉〈コレラ問題〉についての評価を伴うことになる。例えばローマの「イル・ベルサリエーレ」紙は、「南部イタリアの併合以降にとられた政策の方向性が、民衆を等閑にしていたことを強硬に非難」し、フィレンツェの「ラ・ガゼッタ・ディターリア」紙は、「ナポリの民衆の異常な人口増加に対する、不十分ではあるが有効な解毒剤として、コレラを讃えるという悪趣味」な反応を示した。

また、必ずしも同書の反響のみを受けたものとも言い切れないが、デプレーティス内閣の外相であったマンチーニはナポリ人であったこともあり、ナポリ市内の再開発事業を法案として提出し、1885年1月15日、〈ナポリ市の再開発に関する法令〉、通称〈リサナメント法〉が施行されるにいたる。ムニチーピオ広場とボルサ広場を連結し、鉄道駅まで繋ぐ「大通り」の開通がそのメイン事業となり（現在のウンベルト大通り）、上記の四つの庶民街を分断し、その衛生環境を改善することを目的としていた。だが後にセラオが「張りぼて」と称するように、大通りに沿った豪華な建築物が目立つものの、その後背地には依然として、劣悪な環境の住居が残り、現在にいたっている。

1906年に出版された第二版では、1884年の9編を「二十年前 *Venti anni fa*」という章にまとめ、その後1903年までに発表していた4編を「現在 *Adesso*」、そして1905年に発表した8編を「ナポリの心 *L'anima di Napoli*」として追加している。その後の版では、必ずしも三部構成とはなっておらず、1884年の9編のみを掲載しているもの、あるいは最初の二部のみとしているものもある。だが第二部となる「現在」は、ナポリのリサナメント事業がいかに不十分であるかを告発した内容となっており、初版の「二十年前」で提起した問題を引き継いでいるため、その関連性はきわめて緊密であり、併せて読むことが望ましい。

『ナポリの腹』の文学作品としての評価は当時から高く、クローチェはセラオのフィクション作品の代表作『クッカーニャの都』よりも優れているとしている。そしてセラオの死後、その評価は高まるばかりで、小説というよりは明らかに「ルポルタージュ」でありながらも、現在では広い意味での「小説」として位置付けられる傾向にあり、ナポリを描いた文学作品の中でも圧倒的な存在感を今にいたるまで誇っている。

## 2. マティルデ・セラオについて

マティルデ・セラオは1856年2月28日、この世に生を受けているが、意外なことにその生誕地はナポリではなく、ギリシアのパトラスであった。父フランチェスコ・サヴェーリオ・セラオは1848年の暴動に加担した愛国主義者であったために、暴動終息後ナポリを後にしてギリシアに亡命した。そしてその地で、イタリア語と音楽の教授を生活の糧としていたのだが、教え子のひとり、ギリシア貴族の娘パオリーナ・ボレリー（あるいはボンリー）と恋に堕ち、マティルデが生まれたのだ。

マティルデが四歳の時、両シチリア王国最後の国王フランチェスコ二世はナポリを後にして、ガリバルディが入城する。その知らせを耳にした父フランチェスコ・サヴェーリオは、若い妻と娘を連れて、ナポリに向かった。だがここでもマティルデは、まだナポリに足を踏み入れていない。フランチェスコ・サヴェーリオは妻と娘を、カゼルタ近郊のヴェンタローリにある実家に預け、自らは単身ナポリに居住し、旧知のジャーナリストたちから仕事を斡旋してもらい、記事を書いてはカフェを渉猟するという気楽な「知識人」生活を堪能する。パオリーナとマティルデがナポリで生活を始めるのは、その2年後であった。つまり、ナポリ女性の代弁者であり「ア・シニョーラ」と親しみを込めて呼ばれ愛されたマティルデ・セラオは、六歳になるまでナポリを見たことがなかったのだ。

マティルデは男の子のような気性で、部屋にじっとしていることはなく、巨体を揺すりながらそこら中を駆け回り、小学校に入っても、ろくに読み書きも出来なかったらしい。あるいは、関心を示さなかったということであろうか。それが年を重ねるにつれ、母パオリーナの優しい説得によって、徐々に、「書くこと」に興味を抱くようになる。

「書くこと」とジャーナリズムの世界にマティルデが本格的な興味をいだくようになったきっかけは、間違いなく父フランチェスコ・サヴェーリオの影響であろう。マティルデは女学校時代、学校が終わると父が記事を寄稿していた新聞社に顔を出し、ジャーナリストたちの編集局での論争を、食い入るようにつめ、聞き入りながら成長していった。師範学校を卒業したマティルデは、とりあえずは生活のためもあって、電信局に就職する。だがほどなくして地元ナポリの新聞各紙に記事を書くようになり、電信局を退職して、筆で身を立てる決意をかためた。当初は短いコラムや記事が中心であったが、やがては短編小説を掲載するようになっていく。

26歳の時、つまりは1882年に、大きな転機が訪れる。10年前からイタリア王国に併合され首都となっていたローマの新聞「カピタン・フラカッサ」紙と、正規の編集者としての契約を交わ

し、ナポリを後にするのだ。翌年には代表作のひとつである長編小説『ファンタジア *Fantasia*』を発表、その精緻で力強い筆致で描かれた、女子寄宿学校の少女たちの妄執は多くの読者を引き付けた。

そして1884年、ナポリのコレラをめぐる言説をローマで見聞きしながら、強烈な郷愁と、ナポリ人に寄せる母のような愛情と、現実に向き合う優れたジャーナリストの感覚によって、『ナポリの腹』を上梓している。おそらくこの頃には既に、エドアルド・スカルフォーリオおよびダニエリ・ツィオと親交を結んでいたと言われている。1885年2月28日、スカルフォーリオとセラオは結婚、イタリアのジャーナリズムの歴史に輝くカップルがここに誕生した。二人はすぐさま新聞「コッリエーレ・ディ・ローマ」紙を創刊している。

だが同紙は経済的な問題から長くは続かず、二人は1888年にナポリに拠点を移して、「コッリエーレ・ディ・ナポリ」紙を創刊する。以降、セラオはナポリに居住し、ナポリと向き合い、ナポリの作家としてのアイデンティティを強烈に自覚していくことになる。1891年には「コッリエーレ・ディ・ナポリ」の権利を売却して、その資金を元に、さらに別の日刊紙を創刊する。現在まで続くナポリの有力紙「イル・マッティーノ」の誕生である。

セラオはその間も、政治小説『ローマの征服 *La conquista di Roma*』、前述した傑作『クッカーニャの都』、『ケッキーナの美德 *La virtù di Checchina*』といった長編や、『本当の話 *Dal vero*』、『小さき者たち *Piccole anime*』といったヴェリズモの影響の濃厚な短編小説集を発表している。『オパール *Opale*』で文壇に登場した1880年から、『ナポリの腹』の改訂版の出た1906年頃までが、彼女の作家としての最盛期であり、上述した代表作の多くがこの時期に書かれている。その文学的関心は、ナポリ庶民の生活を克明に描いたものと、ブルジョワや貴族たちの社交界の矛盾を描いたものに大別される。前者の典型が『ナポリの腹』であり、後者は『三人の女』や『ファンタジア』であろう。だが、その二つの階層が混ざり合っ、ひとつのエートスを共有しているさまを描いた試みも『ケッキーナの美德』や『クッカーニャの都』などに見受けられる。

1970年代以降は、こうしたフィクション作家としてのセラオに加えて、ジャーナリストとしての彼女の功績を重視した研究が増え、新聞のコラムを編纂したものがいくつか出版されている。女性への教訓などをまとめた『生きる術 *Saper vivere*』はその中でもとりわけ高い評価を受けつつある。

1927年7月25日、マティルデ・セラオは、この世を去った。二人の息子が彼女から受け継いだ「イル・マッティーノ」紙は今日もナポリのエディーコラを飾り、ナポリ人に親しまれ、ナポリの現実を伝えている。

## 注

- 1) ベンディーノ地区にかつてあった通りで、19世紀末の再開発（リサナメント）事業によって消滅した。現在のウンベルト通りとマリナーナ通りの、およそ中間地点に位置していて、生地を中心とした商店が立ち並んでいたことから「メルカンティ（商人）」通りと呼ばれた。
- 2) ポルト地区の通り。スリッパ（チャバッタ）工房が軒を連ねていたことから、ザバッテリア通りと呼ばれた。
- 3) ポルト地区。ナイフ（コルテッロ）工房が立ち並んでいたことが通りの名称の由来。
- 4) ポルト地区。兵器の製造工房が並んでいたことから、剣を意味する「スパーダ」が通りの名称となった。
- 5) ベンディーノ地区。現在では「サン・ピアッジョ・アイ・タッフエタナリ通り」と名称を変えている。薄琥珀織り（タッフエタ）の職人が多く住んでいたことから。
- 6) ベンディーノ地区の通りで、17世紀から現在まで、上着（ジュッポネ）の工房が集まっていたため「ジュッポナリ通り」とも呼ばれている。「マテラッサイ通り」と呼ばれていたのは、18世紀末から20世紀初頭までで、マツレス（マテラッソ）製造の工房もあったことから。
- 7) ベンディーノ地区。かつてサンタ・バルバラ教会があったことから。
- 8) 「第七天」の意。
- 9) サン・ロレンツォ地区。
- 10) ベンディーノ地区。「ラヴィナイオ」は「洗う（ラヴァーレ）」から。名称の由来は、雨の日に高台から降りてくる水が、文字通り街路を「洗う」ためであるという説と、共同洗濯場があったためであるとする説がある。
- 11) サン・ロレンツォ地区。中世には「乗馬する（カヴァルカーレ）」ことができた地域であったことから。
- 12) ベンディーノ地区。サントルカンジェロ教会があったことから。同教会に隣接する修道院には、ポッカッチョのミュージズであるフィアンメッタが暮らしたことがある。
- 13) 〈フォンダゴ〉は、もとは倉庫であったところに貧民が住居として住み着いた家屋。地階あるいは半地下の門衛所を住居に転用した〈バツソ〉と並んで、19世紀ナポリの劣悪な居住環境の代名詞である。倉庫であったために、窓はなく、下水道設備もなく、陽も差さず、住居としての用をなさない。19世紀末のリサナメント工事の際に、そのほとんどが解体された。〈バツソ〉は現在でも住居として使用され続けている。
- 14) かつてイタリア半島で広く使用されていた貨幣単位。20ソルドが1リラに相当する。
- 15) ベンディーノ、メルカート、ポルト、ヴィカリアアの四地区。ナポリの中でもとりわけ貧民が多く密集する地区で、19世紀のベストの際にも、被害が甚大であった。
- 16) 100セントが1リラに相当する。
- 17) 〈モンネツァ〉は「ごみ」を意味するナポリ方言。
- 18) 1865年のコレラは84日続き、6,060人が感染して3,163人が死亡した。
- 19) ナポリ市内では2,089人が感染し、1,391人が死亡、郊外では2,206人が感染、1,519人が死亡した。
- 20) ヴェネツィア風の装飾と照明が人気であった。「オットイーノ風」は、ヴェネトのパロック画家パスクワーレ・オットイーノ（1578-1630）を指していると思われる。
- 21) モナチェッロ（Monacello または Munaciello）は、ナポリに古くから言い伝えられてきた霊で、修道士の格好をした子供の姿をしている。多くは古い屋敷に住み着き、騒音などの悪戯をする無邪気な霊であるとされていて、日本の座敷童に似ている。セラーオはモナチェッロに関心が深く、*Leggende napoletane* においても一章を割いて詳述している。



- 22) アッシステイト (assistito) は、霊に憑かれた者のことで、霊の声、つまりはあの世の声を聞くことができるために、宝くじの当選番号を知っているとナポリでは考えられている。セラオは長編小説 *Il paese di Cuccagna* においてアッシステイトを登場させ、庶民ばかりかブルジョワまでもがその迷信を信じている様相を描いている。アッシステイトに関しては、Scafoglio の *Numeri: il gioco del lotto a Napoli* をはじめとする宝くじを扱った著作において詳述されている。

